

平成十九年度 入学試験問題

国語 (理系)

一〇〇点満点

※配点は、学生募集要項に記載のとおり。▽

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は1ページから7ページまでの7ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページ(うち8ページは下書き用)ある。
- 三、問題は全部で3題ある。全問解答すること。
- 四、解答はすべて解答冊子の指定された箇所記入すること。
- 五、筆答開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

「患者が最後まで希望を持つことができるためにはどうしたらよいか」ということは、ことに重篤な疾患にかかわる医療現場において切実な問いである。病気であることが知らされる——だんだん状態が悪くなることを知り、有効な対処法はないことも知る——自分の身体がだんだん悪くなり、できることがどんどん減って行く——死を間近に感じるようになる。

このような状況で、「希望」とはしばしば、「治るかもしれない」という望みのことだと思われる。あるいは「自分の場合は通常よりもずっと進行が遅いかもかもしれない」ということもある。いずれにしてもまさに「希望的」観測である。だが、希望とはこうした内容の予測のことなのだろうか。

もしそうだとすると、それこそ確率からいって、そうした患者の多数においては、はじめに立てた希望的観測が次々と覆されるという結果にならざるを得ない。そこでは「最後まで望みをもって生きる」ということにはならないだろう。そもそも、「癌」と総称される疾患群をモデルとして、「告知」の正当性がキャンペーンされてきたのは、患者が自分の置かれた状況を適切に把握することが今後の生き方を主体的に選択するために必須の前提であったからではなかったか。右に述べたような望みの見出し方は、非常に悪い情報であつても真実を把握することが人間にとつてよいことだという考えとは調和しない。

では「死は終わりではない、その先がある」といった考え方を採用して、希望を時間的な未来における幸福な生に託すというのはどうだろうか。だが、医療自らが、そのような公共的には根拠なき希望的観測に過ぎない信念を採用して、患者の希望を保とうとするわけにはいかない。

ところで、死は私たち全ての生がそこに向かっているとどこである。遅かれ早かれ私の生もまた死によつて終わりとなることは必至である。その私にとつて希望とは何か——考えてみればこの問いは、重篤な疾患に罹った患者にとつての希望の可能性という問題と何らか連続的であろう。そして、多くの宗教は死後の私の存在の持続を教えとして含み、そこに希望を見出すうとしてきた。それは人間の生来の価値観を肯定しつつ、提示される希望である。だが他方宗教的な思想には、死後の生に望

みをおく考え方を拒否する流れもある。その場合は、人間はもつとラディカルに自己の望みについて突き詰めるのである——「死後も生き続けたいという思いがそもそも我欲なのである」とか、「自己の幸福を追求するところに問題がある」というように。それは生来の価値観を覆しつつ提示される考えである。では、死が私の存在の終わりであることには何の不都合もないではないかとして、これを肯定した場合に、希望はどこにあるか——どのような仕方であれ、「死へと向かう目下の生それ自体に」と応えるしかないのである。

終わりのある道行きを歩むこと、今私は歩んでいるのだということ——そのことを積極的に引き受ける時に、終わりに向かって歩んでいるという自覚が希望の根拠となる。そうであれば「希望を最後まで持つ」とは、実は「現実への肯定的な姿勢を最後まで保つ」ということに他ならない。つまり、自己の生の肯定、「これでいいのだ」という肯定である。「自己の生」といつても、生きてしまっている生(完了形)としてみることで、生きつつある生(進行形)としてみることで二重の視線がある。完了したものという生のアスペクトにおける肯定は「これでよし」との満足である。他方、生きつつある生、つまり一瞬先へと一歩踏み出す活動のアスペクトにおける、前方に向かつての肯定、前方に向かつて自ら踏み出す姿勢が、希望に他ならない。

そうであれば、死を肯定するとしても、それが一歩踏み出した先が死であろうともよいのだという肯定的な前向きな姿勢におけるものか、あるいは一歩踏み出すことから退く方向、生を否定する方向におけるものか、が差異化する。つまり、それは希望ある死への傾斜と絶望からの死への傾斜との区別である。前向きであり得るかどうかは、完了形の生(これまで歩んできた生)を肯定できるかどうかにかかると。絶望は、現状の否定の上での、一歩踏み出すことの拒否である。

では、どこにそうした肯定的な姿勢の源を求められるだろうか——人間の生のそもそものあり方に、だと思ふ。生は独りで歩むものではない。共同で生きるように生まれついている人間は、皆と一緒に、あるいは、少なくとも誰かと一緒に、歩むのでなければ、肯定的姿勢を取れないようにできているらしい。そうであればこそ、希望は「自分は独りではない」とこの確認と連動する。死に直面している人と、また厳しい予後が必至の病が発見された人と、医療者が、家族が、友人が、どこまで共にあるかが鍵となる。「先行きはなかなか厳しいところがあります。でも私たちはあなたと一緒に歩んでいきますか

ら——私が敬愛する医療関係者たちが「希望のもてる説明を」というリクエストに対して見出した応答は、まさしくこのことと言及するものであった。——もちろん、悲しみが解消されるわけではない。悲しみは希望と共にあり続ける。⁽⁴⁾それが死すべき者としての人間にとつての希望のあり方なのであろう。

(清水哲郎「死に直面した状況において希望はどこにあるか」より。一部省略)

注(*)

アスペクト＝局面、様相。

問一 傍線部(1)について、なぜ「調和しない」のか、説明せよ。

問二 傍線部(2)の「人間の生来の価値観」とは、この文脈の中ではどのような意味か、説明せよ。

問三 傍線部(3)の「現実への肯定的な姿勢を最後まで保つ」とはどのようなことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)の「希望のあり方」について、筆者は文中でどのように考えているか、説明せよ。

白
紙

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

かつて、「若者の活字離れ」と言われた。しかしこれだとしてあまりにも不正確だ。これは、「かつて本を読んでいた若者の活字離れ」で、「大学生の活字離れ」というものでしかない。その昔、世の中には大学生以外の若者だとして大勢いた。初めから本なんか読まないでいた「若者」だとしてゴマンといたのだ。「今の若者は難解な思想書など読まない」とこの二十年ばかり言われ続けて、しかしその一方で、平気で難解な思想書を読む若者だとして増え続けてはいるのだ。もっと物事を正確に言ってみよう——「今の若者は、私達が読んだような思想書は読まずに、別の思想書を読んでいる」と、それだけのことだった。本を読むやつはいつだつて読む。本を読まない人間は、いつの時代にもいる。そしてこの近代という期間の日本は、その両者に対して、「本を読むべきだ。本を読むということが自身の思考力を身につけることなのだ。人は言葉で思考し、その思考を言葉によつて整理する。人にとつて思考と認識とは、人である限り続く義務であり権利であるはずのもので、そのことの結果によつて得るものが「自由」と呼ばれるものだ」と、知性なるものが言い続けてきた時代だ。その、強制力にも似た声があればこそ、ともすれば怠惰になりがちな若者達は、かろうじて本を読み続け、思考というか細い力を持続させて来たのだ。その努力を捨てて、活字の側が「活字離れ」などという安易なレッテル貼りで、啓蒙という義務を怠つてよい訳がない。にもかかわらず、活字はそれを怠つたのだ。

世の中には、大学なるものと無縁のままの人間がいくらでもいる。がしかし、それらの人間が知性と無縁である訳ではない。がしかし、大学に代表されるような知性は、そうした「異質な知性」の存在を拾い上げられなかった。

世の中には、文章以外の表現はいくらでもある。絵という視覚表現は、文字以上に古い人間の表現手段だ。がしかし、「これをこう読め」と活字なるものに命令されることに馴れてしまった活字人間は、その「どう読み取ってもいいよ」と言っている視覚表現の読み取りが下手だった。まるで「役所の書式に合致してないのでこれは受け付けることができません」と言う頑なな役人のように、自分達とは系統の違う文化の読み取りを、活字文化は拒絶し続けて来た。すべての文化には、それが文化で

あるような構造が隠されている——だから、読み取りという作業が必須になる。その構造を自身の頭で読むということが、そんなに難しいことだろうか？ ^(イ)へんけんのない人間は、未知の人間であつても、「この自分の目の前にいる人間もやはり人間なのだから、必ずコミュニケーションを成り立たせる道はあるはずだ」と考えるものだ。人は、現実生活の中で、無意識の内に自分とは異なる異文化——即ち、他者との接点を見出そうとしているものなのに。

⁽²⁾活字離れというのは、活字文化という閉鎖的なムラ社会に起こった過疎化現象だ。「ここにおいても自分達の生活は成り立たない、ここにおいても自分のあり方というものは理解されない」と思った若者達は、トカイという ^(ウ)雑駁な泥沼に消えて、もう山間のムラには帰つて来ない。次代の後継者はムラを去つて、ムラはさびれる。さびれてしまったことを理解しない閉鎖的なムラの住人達は、ただ「寂しくなった」という愚痴ばかりを繰り返して、そんな愚痴が、人をそのムラから追い払う元凶の一つでもあることに気づかない。ムラはさびれ、そのムラを發展させてムラ社会という閉鎖性を解き放つはずだった後継者達は、^(エ)しょうてんを欠いたトカイの中で無意味なろうひを繰り返す。退廃の元凶はどこにあるのかと言われたら、私には、「ムラにある」としか言えない。活字の責任というものは、想像を絶して重いのだ。

(橋本治『浮上せよと活字は言う』より)

問一 傍線部(ア)く(オ)のうち漢字には読みがなを記し、ひらがなは漢字に改めよ。

問二 傍線部(1)の意味をわかりやすく説明せよ。

問三 傍線部(2)について、次の間に答えよ。

(A) 活字文化はなぜ「閉鎖的なムラ社会」にたとえられるのか。

(B) 筆者が考える「過疎化現象」とはどのようなものか。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

中納言長谷雄卿は、学九流に渡り芸百科に通じて、世に重くせられし人なり。ある日夕暮れがたに、内裏へ参らむとせられる時、見も知らぬ男の、眼居賢けにて凡人ともおぼえぬ、来ていふ、「つれづれに侍りて、双六を打たばやと思ひ給ふるに、その敵恐らくは君ばかりこそおはせめ、と思ひ寄りて、参りつるなり」といへば、中納言あやしう思ひながら、試みむと思ふ心深くして、「いと興あることなり。いづくにて打つべきぞ」といへば、これにては悪しく侍りぬべし。わがるたる所へおはしませ」といへば、「さらなり」とて、物にも乗らず供の者も具せず、ただ一人男に従ひて行くに、朱雀門のもとに至りぬ。「この門の上へ昇り給へ」といふ。いかにも昇りぬべくもおぼえねど、男の助けにてやすく昇りぬ。すなはち盤・調度取り迎へて、「賭物には何をかし侍るべき。われ負け奉りなば、君の御心に見目も姿も心ばへも足らぬ所なくおぼさむまならむ女を奉るべし。君負け給ひなば、いかに」といへば、「われは、身に持ちと持ちたらむ財宝を、さながら奉るべし」といへば、「しかるべし」とて打ちけるほどに、中納言ただ勝ちに勝ちければ、男、しばしこそ世の常の人の姿にてありけれ、負くるに從ひて賽を掻き心を碎きけるほどに、元の姿現はれて、恐ろしげなる鬼の形になりけり。「恐ろし」とは思ひけれども、「さもあれ、勝ちだにしなければ、彼は風にてこそあらめ」と念じて打ちけるほどに、つひに中納言勝ちはてにけり。

(『長谷雄草子』より)

問一 傍線部(1)～(4)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(5)はどのような意味か、説明せよ。

問題は、このページで終わりである。